

2026_0311「東京の牡丹雪（2）」日々の理科 4231号

お茶の水女子大学 サイエンス&エデュケーション研究所 田中 千尋

昨日の東京では、早春とは思えないほどの大粒の雪が降りました。写真に写っている雪は、いわゆる「牡丹雪」と呼ばれる降り方で、細かな雪ではなく、ふわりと大きな塊となって落ちてきます。よく観察すると、その正体は一つの大きな結晶ではなく、たくさんの樹枝六花と呼ばれる枝分かかれした雪の結晶が集まり、互いにくっついたものです。こうして集合した雪片は非常に大きくなり、ときには直径が3センチほどにも達します。

このような降り方は、実は寒さの厳しい雪国や北欧ではあまり見られません。気温が低すぎる地域では、雪の結晶は乾いた粉のような軽い雪となって降ることが多く、大きな塊にはなりにくいのです。むしろ、気温が0℃前後で湿り気の多い空気の中で降る都市の雪こそが、こうした大粒の雪を生み出します。

昨日の小石川でも、雪は静かに、しかし密度の高い降り方をしていました。大きな雪片が次々に舞い落ち、遠くの木々が白く霞むほどでした。視界の奥にある樹木の輪郭がぼんやりと消えていく様子は、まるで深い雪国の景色のようにも見えます。

しかし、この写真が撮られたのは東京の市街地、それも3月に入った頃の風景です。芽吹きを待つ木々の前を、大粒の雪が静かに通り過ぎていく光景は、早春の東京とはにわかには信じがたいものです。都市の空に現れた、ほんのひとときの冬の名残りと言えるでしょう。

